

「作る」を通して生活を楽しむ授業作り

～仲間と一緒に～

竹内君江

研究協力者：岳野公人（金沢大学教育学部）

1. テーマ設定の理由

高等部2年生は男子6名、女子3名、計9名で構成されている。クラスとしてのまとまりは徐々にできてきており、リーダーとなって友だちをまとめようとする生徒や友だちに思いやりをみせる生徒もいる。その反面、友だちのまねをして反応を楽しんだり、お互いを注意しあって口喧嘩になったりすることもある。

それぞれの普段の様子では、感覚的な遊びを好んだり、一人でマイペースに過ごしたりする生徒、教師や友だちに積極的にかかわって会話を楽しむ生徒、自分でいろいろな情報を取り入れて活発に遊ぶ生徒までと様々である。それゆえ、興味をもつ対象もあまり重ならず、好む活動もばらばらなのでクラスで活動するときは全員がその活動に集中して楽しむことがなかなか難しい。

また学校生活全体から高等部2年生たちをみると、いよいよ現場実習を体験し、社会へ出て行くことを意識するときである。この時期に自分自身で生活に楽しみを見つけたり、周りの人と上手にかかわったり、仲間とひとつの体験を共有することは自信をもって社会へ踏み出すために大切なことと思われる。

そこで比較的どの生徒にもわかりやすく、活動が理解しやすい形態と考え、物作りを生活の授業の中心にしようと考えた。家庭や学校生活に活かせるもの、自分で楽しめるもの、人にあげるもの、身近なものなど、何かを作ることで日常生活に楽しむきっかけを作ることができないかと思った。例えば興味をもつ対象を上げたり、道具の使い方を知ったり、工夫することを知ったり、そこで体験したことを話題にしたり、作品が完成したことで自信をもったりすることが生活を楽しむことになるのではないかと考えた。そのために作る過程の中では材料の買い出しや準備、後かたづけまでを含み、生徒一人ひとりにあった何か楽しめる要素をもてるように工夫できればと考えた。また物作りを通して友だちのよいところを見つけたり、助けあったり、自分の気持ちを伝えたりして仲間との付き合い方を学んでいってほしいと考えた。

物作りを通して作ったものを使用し、作り方をおぼえ、学校以外の場合でも生徒が自ら生活の中へ取り込むことができれば余暇の充実にもつながるのではないかと、余暇にまでつながらなくともその芽となるものを育てられればと願ってこのようなテーマを設定した。

2. ねらい

(1) テーマのねらい

- ・ いろいろな物を作る活動を通して興味の幅を広げ、作り上げることで達成感を感じたり自信をもったりする。
- ・ 物のできあがる過程を知り、道具の扱い方や自分で工夫することを身につけ、そこで得たものを自分で生活の中へ取り入れる。

- ・友だちと一緒に作ることで、友だちとやり取りしながら、また、作ったものを一緒に使いながら経験を共有し、お互いの存在を認め合う。

(2)「作る」活動全体に対する個人の实態とねらい

	個人の实態や様子	個人のねらい
U男	手先が器用で作業的な活動を好み、道具にも興味をもっている。じっと話を聞くのが苦手な自傷行為をし、R男にまねをされると余計に苛立つことがある。マイペースで自分から友だちにかかわることはあまりないが「○○して」と促したりする。	友だちに自分の気持ちを伝えつつ落ち着いて物作りに取り組む。いろいろな物の作り方を知り、話題にし、興味・関心を広げる。
O子	雑誌を見ることやシャボン玉、感覚的な遊びを好む。授業の参加にむらがあり、活動に集中できず立ち歩くことも多い。友だちや教師に人なつっこく寄っていくことがある。簡単な調理を家庭でもしていて比較的興味・関心が高い。	教師や友だちと一緒に活動に参加し、友だちに得意なところを認めてもらう。物作りを通して興味・関心を広げる。
K子	活動には積極的に取り組むものの長続きせず、立ち歩き、M男、R男などにくっついていくことが多い。落ち着いて手元を見ることができれば結構器用である。調理が好きで、特に混ぜたりフライパンなどで焼いたりすることには意欲的。	教師や友だちと一緒に活動に参加し、友だちに得意なところを認めてもらう。物作りを通して興味・関心を広げる。
S男	活動には意欲的に取り組み、細かい作業が苦手でも根気よく続けることができるががんばり屋である。見通しや目的をもって活動できる。クラスの友だち全員に仲良く接することができ、人気がある。	友だちと助けあいながら物作りをし、完成させる。いろいろな物の作り方を知り、話題にし、作品を完成させて自信をもつ。
T子	活動に見通しをもって意欲的に取り組むことができる。ちょっと苦手だと感じると手が止まってしまうときもあるが、自分の仕事だと責任感をもつことができれば最後までがんばろうとする。友だちの気持ちをよく察することができる。	友だちと助けあいながら物作りをし、完成させる。いろいろな物の作り方を知り、話題にしたり、生活に取り入れたりする。
N男	積極的ではないが活動に見通しをもてる簡単な作業であれば教師や友だちと一緒に活動できる。S男のことが好きで甘えるように接することがある。ピアノや本を見るなど一人で過ごすことが多い。	教師や友だちと一緒に活動に参加し、友だちに得意なところを認めてもらう。物作りを通して興味・関心を広げる。
H男	物作りは好きな活動で、やり方さえわかれば積極的に集中して活動に取り組むことができる。左利き、音が大きいものが怖い、先へ急ぐ傾向がある。友だちへは自分からかわることは少ないが楽しい雰囲気の中に友達といことは好む。	友だちと助けあいながら物作りをし、完成させる。いろいろな物の作り方を知り、興味・関心を広げる。完成させて自信をもつ。
M男	物作りが好きで集中して活動に取り組むことができる。クラスではリーダー的存在であるが自分の意見が通らないときや失敗すると気分が不安定になるときがある。いろいろな情報源から生活の知識を得て自分の中で消化し、話題にすることができる。	教師や友だちの意見も聞きながらリーダーとなって活動する。物作りをしてその作り方や方法を身につけ、生活に取り入れたりする。
R男	物作りが好きで集中して活動に取り組む、見通しをもって参加することができる。特に木工には自信をもっていて教師に認めてほしいという気持ちが強い。友だちのまねをして面白いが反面、世話好きで優しいところもある。	物作りを通して友だちと協力し、良いところを認め合う。物作りをしてその作り方や方法を身につけ、生活に取り入れたりする。

3. 活動の流れ

(1)「作る」題材を選ぶときの視点

どのような物を「作る」のか、いろいろな物が考えられる。以下のことを大切にしながら「作る」題材を選び、作る活動に取り組んだ。

- ・季節や学校行事などにあっていて生徒の生活の中にあるもの
- ・どうしてそれを作るのかがわかり、作る意欲がもてるもの
- ・作る工程がわかりやすく、道具を使ったり、材料が変化したりして興味深いもの
- ・一人ひとりの個性が出るもの
- ・生活に活かせるもの、使うもの

(2) 活動の内容と流れ

以下のように「活動内容」「活動設定」の理由や「手だて」を表にした。なお、□の中には教師の次の活動に対しての留意点、他の教師からのアドバイスなどを表した。

	活 動 内 容	●活動設定の理由や◎活動への手だて
1 学期 4 月	母の日のプレゼント作り ・押し花の壁飾り作り ・カード作り ・ラッピング	●母へのプレゼントは経験もあり、意欲をもちやすい ◎見通しをもつため練習を含め2回作る ◎興味もてるように、いろいろな道具を使う ◎できた作品を発表して友だちと認め合うようにする
	○作る工程が細かすぎると楽しめる生徒もいるが、じっくり取り組めない生徒もいる	
	5 月 おそろいTシャツ作り ・Tシャツを買いに行く ・模様作り ・アイロンでプリントする	●一泊旅行でクラスの仲間と一緒に着る目的で作る ◎中心になる「作る」活動は単純でどの子も取り組みやすいものにする ◎おそろいの部分と個性が出せる部分を作る
6 月	○せっかく作ったので1回だけではなく、作ったTシャツをもっと使いたい	
	6 月 おそろいTシャツでサイクリングにいこう ・自転車の練習をする ・おやつを買いに行く ・川原へサイクリング	●おそろいTシャツを着ていく楽しい機会をつくる ●日頃からサイクリングを楽しむ生徒が何人もいる ◎練習して安全に気をつけて行うようにする
	○もっとわかりやすく興味もてそうな調理にしてみては？ ○自分だけのものより、協力してみんなで作るものにしてみては？ ○活動内容につながりがあるものにしてみたら？	
2 学期 9 月	フルーツ白玉作り① ・買い物、準備をする ・フルーツ白玉を作る	●白玉を夏休み中、家庭で作っている生徒がいた ●白玉は簡単でアレンジが豊富である ◎買い物や準備を2班に分かれて活動をする ◎一人ひとりに役割分担をする
	○もっと友だちと一緒に協力して作ることができるようになりたい ○生徒が自主的に作ることができたらよい	
	フルーツ白玉作り② ・買い物、準備をする ・フルーツ白玉を作る	◎中に入れる果物をみんなで決める ◎その他は見通しもてるように設定を変えない

10月	○生徒からの提案を大切に、白玉に抹茶やココア味をつけてみよう	
	フルーツ白玉作り③ ・買い物、準備をする ・フルーツ白玉を作る	◎中に入れる果物をみんなで決める ◎生徒の提案から抹茶味とココア味の白玉を作る ◎どちらを作るか班単位で選択する ◎その他は見通しがもてるように設定を変えない
	○生徒の提案から今度はホットケーキに抹茶やココア味をつけてみよう	
	抹茶味とココア味のホットケーキ作り ・買い物、準備をする ・ホットケーキを作る	◎試食してみてどちらを作るか選択する ◎それまで同じ班だったが、食べたい方を選びそのメンバーで班を構成する
○全体と自分のものとして作る部分があるほうがわかりやすい ○もっと「一緒に」を大切にしたいほうがよいのでは？		
11月	とうふ作り ・大豆のさやから豆をとる ・とうふの型作り ・とうふ作り	●身近な食品のなりたちを知ることは大切である ●大豆からとうふに変わる過程が興味深い ◎大豆は栽培班の生徒が育てた物を使う ◎豆とりや道具作りからかわることで各自が得意なことや好む活動を取り入れ、意欲をもてるようにする
12月	・とうふ作りの写真をまとめる	◎とうふはみんなで作るが、各自の型に入れることで自分の分をはっきりさせ、活動をわかりやすくする ◎役割分担を細かくする ◎友だちにどう協力したらいいかを声かけする

※活動は主に金曜日4, 5, 6限生活の授業でおこなう
※担当の教師は2人(授業内容によっては3人)

4. 活動の実際

(1) 母の日のプレゼント作り

プレゼントは学校に植えてあったパンジーなどの花を使って押し花の壁飾りを作ることにした。土台になる木片のサンドペーパーがけ、ドリルでの穴あけ、ステンシル、押し花のアレンジ、シール貼り、紐通しなどたくさんの工程があった。何人かの生徒は母を喜ばせようと自分なりに工夫し、友だちの作品を参考にする様子もみられた。また、作業工程自体が楽しいようで積極的に取り組む生徒も見られた。しかし、工程が多すぎたのかなか集中して取り組むことができなかった生徒もいた。O子もそのうちの一人である。ステンシルなどは比較的好む活動なものの、少しステンシルをすればすぐ押し花を貼るというように流れていくため、落ち着いて取り組むことができなかった。これは次回の活動内容を考えるときの課題となった。度々立ち歩いていた彼女だが、母親に関係することだとわかっている様だった。カードを書くときには声かけをするとすんなり「ありがとう O子」と教師と一緒に書くことができた。

最後にみんなの作品を見せあって、教師から声かけする場面を設けた。みんなから注目され、達成感や認められたという自信を何人かの生徒はもてたようである。後日、連絡帳に数人の保護者からコメントがあった。生徒と家族の間、家族と教師の間で話題にすることができた。O子の保護者からは「ありがとうのカードにジーンときました」というコメントをもらった。

(2) おそろいTシャツ作り

一泊旅行は生徒にとって楽しみな行事の一つである。自分で作った仲間のおそろいのTシャツを着ることで旅行に行く楽しみをもっと増やせると考えた。中学部でも同じような取り組みをしたことがあり、その経験のあるT子は「作ろうね」と特に積極的だった。

まず、準備として無地のTシャツを買いに行った。少し遠い店まで歩いたので動くのが苦手なT子は段々無口になり、疲れた様子だった。しかし、がんばって店に着くと「女の子の分は私が買うから」と張り切ってレジにTシャツを持っていった。

次はTシャツの模様となる作品を作った。Tシャツの模様としてはどの生徒にも取り組みやすいように好きなマークや自分のイニシャルなどをビーズ、紙テープ、木片、豆から自由に選んで台紙に貼りつけることで表すことにした。それをデジタルカメラで撮り、アイロンプリントで熱転写した。T子は友だちの作品や見本をまねつつ、自由に集中して作っていた。また、O子のようにマイペースでゆっくりとビーズや木片で感覚遊びをしながら取り組んでいる生徒もいた。熱転写してシートをめくる部分では、嬉しそうな声を出したり、触って確認したりと、ほとんどの生徒が注目して喜んでいた。

一泊旅行で着た後にサイクリングでも着るようにしたためか、夏休みのクラス合宿にO子とT子が着てきた。

また、秋の現場実習の初日にもT子が着ていくことがあった。彼女にしてみれば自分だけが一週間早い現場実習だったため、自分を励ますような意味があったのではないかと思った。実習担当の人にもTシャツを見せて、打ち解けるきっかけにしていたようである。彼女の実習ノートを見てとてもうれしいことだと思った。

10月 14日 (火)	
仕事内容	きょうはTシャツを作りました。 Tシャツの模様はビーズや紙テープで 作りました。あじはるのTシャツも あじはるのTシャツも
実習先から	今日はTシャツにビーズや紙テープで模様を作りました。 模様はかっこいいと思います。お家はかっこいいTシャツ を作りました。あじはるのTシャツもあじはるのTシャツも あじはるのTシャツもあじはるのTシャツも あじはるのTシャツもあじはるのTシャツも

T子の実習ノートより

(3) フルーツ白玉作り

夏休み中の研究会で「もっと生徒にとってわかりやすく意欲がもちやすいもの、調理を中心とした活動がよいのではないか」「何かひとつつながりのあるものがよいのではないか」「自分だけのものではなく、みんなと作るものを」とアドバイスをもらった。そこで2学期は調理を中心とした活動を設定した。

4限に材料の買い出しと調理器具の準備を班に分かれて行い、お互いの活動を報告してから、5・6限にそのまま班ごとに調理することにした。この活動を繰り返すことで生徒の中に見通しが立ち、自主的に活動できる場面も少し増えていったようである。

フルーツ白玉を取り上げたのは夏休み中にO子が家庭で作っていたものであり、その他の生徒にもなじみがあり、調理しやすいと思ったからである。そして色をつけたり、中に何か入れたり、串にさしたりしてどんどん変わるおもしろさも味わえるのではないかと考えたからだ。しかし、最初は教師が計画していたこの白玉のアレンジが自然と生徒の方からの提案で進めることができた。

1回目は基本のフルーツ白玉、2回目は生徒の希望を聞いて中のフルーツを替えて作っ



準備班の様子



「こんなふうに、丸めてよ」

た。このことがM男やR男にとって「自分の希望が通るのだな」とわかり、「同じでは簡単すぎるな」と思わせたのか、次は白玉に味をつけたいと提案があった。それで、3回目は抹茶とココア味のフルーツ白玉を作ることにした。ところが3回目のフルーツ白玉ではM男が水の分量を多くしてしまい、白玉として丸められなくなったのである。そこで焼いて食べることにしたのだが、出来上がって食べてみると意外に好評だった。それを見てホットケーキを連想したR男の提案から今度は抹茶味とココア味のホットケーキ作りへと変わっていったのだった。彼はよほどおいしいと思ったらしく連絡帳のフリースペースに感想を書いていた。この感想のように是非、家でも作って欲しいと思っている。

今	日	は	4	5	6	限	目	の
生	活	で	最	後	の	調	理	実
習	を	し	ま	し	た		最	後
の	調	理	実	習	で	コ	コ	ウ
の	ホ	ッ	ト	ケ	ー	キ	と	抹
茶	の	ホ	ッ	ト	ケ	ー	キ	を
作	り	が	し	た		ど	ち	ら
も	食	べ	て	見	た	ら	お	い
し	か		た	ど	う	ま	た	
家	で	も	作		て	見	た	い
と	思		う	ま	き			

R男の感想

また、この白玉作りでは提案だけでなくM男とR男が活動の中心になることが多かった。せっかく中心になっているこの二人がみんなをまとめ、一緒に活動できるような声かけや環境設定がもっと必要だと思った。

他の生徒たちの様子を見てみると白玉よりもホットケーキを1枚「自分の番」と思って焼くほうがわかりやすく、意欲がもてるようだった。

(4) とうふ作り

引き続き調理に取り組もうと、とうふ作りを行った。大豆から木の型、とうふまでと、一連の過程を経る中で生徒各自がどこかで得意なもの、意欲をもてるものがあり、じっくりと物の作り方、できあがる様子を知ることができればよいと考えた。

また、木の型を各自で作った理由は、ホットケーキ作りの様子から自分の分がわかりやすく、木の型から出すワクワク感も各自が味わえると思ったからである。

大豆については栽培班が育てた物を使うことにした。栽培班に所属している二人には「大豆使わせてね」とみんなで頼み、「いいよ」と許可をもらった。栽培班の二人にとっては自分たちが育てた物をとうふにすることで、より意欲をもつことができたようだった。



大豆をさやから出す



「持っていてやるから穴あけなよ」

大豆をさやから出すところからは全員で取りかかったが、わかりやすい活動なのでみんな集中して取り組んでいた。

とうふの木の型については金沢大学の岳野先生に相談して見本を作ってもらい、材料や作り方を指導していただいた。生徒たちが作りやすいデザインで、しかも機能的なことも考え、どのように作るか研究した。それでも型作りは難しいかと心配したが、生徒たちの半分以上は木工を好み、親しんでいるので意欲的だった。自然とお互いに隣の友だちの板を支えたり、苦手な子を手伝ったりしていた。「手伝ってよー」と友だちにいう生徒もいた。特にR男は自分の得意分野だと自信をもち、N男をよく手伝い、N男もその声かけに応じて作業をしていた。

とうふを作る場面ではなるべく「次は誰にしてもらおうか」と声をかけM男が「じゃあ、〇〇くん」というふうに関わり方を教えてあげてという「こうやるんだよ」と丁寧に教えることができた。何度も大豆と水をミキサーにかけたのでその作業の繰り返しが他の生徒にもわかりやすく、「次やりたい」と言ったり、「タイマー押して」と声をかけあったりしていた。最後の型から抜く作業は丁寧さが要求され崩れてしまう生徒もいたが、ちゃんととうふになって出てきたのでおもしろかったようである。

実は、M男は前日まで風邪で欠席していたので、この日は大好きな陸上部の活動を放課後しないで帰ることになっていた。朝の時点では「陸上部したい！」と情緒不安定で授業にも影響が出るかと心配された。しかし、とうふ作りの間に気持ちが落ち着いたようで「少し片づけしたら帰る」といって言葉どおり笑顔でとうふを持って帰っていった。後日、保護者から「おいしかった」「豆の味がしました」などの感想をいただいた中で「また作りたいと言っています」とM男の保護者からもコメントが寄せられた。保護者もその日の彼の様子を心配していたのでほっとしているようだった。

とうふ作りを終えた一週間後、とうふ作りの時に撮った写真を掲示しようということになった。そのときもM男は友だちと口喧嘩をした後で調子を崩していたのだが「僕、写

き	う	は	生	活	の	時	間
に	作	っ	た	と	う	ふ	を
う	ま	し	た	。	と	う	ふ
お	い	し	か	っ	た	で	す。

M男の感想

真貼りたい」といって積極的に貼っていった。貼りだすと、とうふ作りの過程を思い出し、活動の中心になり「こっちが1番でこっちが2番だよ」と番号をうって矢印を引いてわかりやすいようにしていた。できあがるころには「さっきはごめんな」と友だちに言えるようになっていた。このように夢中になって取り組むことができる活動を通して気持ちを落ちつかせ、友だちとスムーズにかかわることができるのだとわかった。彼にとってとうふ作りは彼の興味・関心にぴったりの題材でとても達成感がもてたのだと思う。

5. まとめと今後の課題

「作る」を通して、より学校生活を楽しんだり、友だちの存在を認め合ったりできればと2学期まで取り組んできた。生徒の日常生活の中へと「作る」「作った物」が浸透していくには、あらためて題材選びの大切さ、活動の繰り返し、そして作った物をどう使うかの経験が重要だとわかった。一度作ってそれで終わってしまうのではなく、繰り返し作ったり、使ったりしていくことで、どう自分自身の生活に取り入れていけばいいのかが生徒にとって少しずつわかっていくようである。またそのままの形ではなく少し形を変えて生徒の日常生活に入っているものもあるのではないかと思われる。

友だちとのかかわり方についてはもっと細かい手だてをもって取り組む必要があったように思われる。それでも自分に自信をもつと友だちに対しても自然と余裕をもって接することができることがわかった。生徒自身が活動を通して成長していくことで、友だちとの関係も変わっていくのではないかと思った。

当初、9人の生徒がみんな楽しむことができる生活の授業の在り方についてばかり悩んできた。だが、ひとつのテーマをもって一連の長い活動をするときに、生徒それぞれに違った意欲をもたせつつ進んでいくことでもいいのではないかと思えるようになってきた。

生徒の好みはみんな違って当然である。それぞれがそれぞれに楽しみをもちつつ活動できる授業にしていきたい。作る物に関しても日常生活に身近にあり、作ってみて再認識できるもの、日常生活に活かされてより生徒が楽しく感じられるようなもの、達成感がもてるものを今後も作っていきたい。



大豆をミキサーにかける



「とうふできたよ」